

学科\学年	1 年	2 年	3 年	合計
普通科地域科学探究科	40	40	40	120
普通科	160	160	160	480

目 次

【巻頭言】	2
兵庫県立柏原高等学校長 稲次 一彦	
運営指導委員会委員長 高畑 由起夫(関西学院大学名誉教授)	
Ⅰ 実施状況	4
(1) 実施計画	4
コーディネーターの役割図	22
(2) 事業結果説明	23
(3) 研究推進部活動内容	30
(4) 地域科学探究科（新学科）の3年間の探究プログラム	32
(5) 運営指導委員会	34
(6) 視察訪問	41
2 各学年の取り組み	42
(1) 1 学年（丹 BAL I & 総合的な探究の時間Ⅰ）	42
(2) 2 学年（探究Ⅱ）	46
(3) 2 学年（丹 BALⅡ）	50
(4) 3 学年（総合的な探究の時間Ⅲ）	53
(5) 3 学年（グローバル）	54
3 第9回「地域課題から世界を考える日」	56
4 第2回「知の探究発表会」	58
5 発表成果例	60
(1) 生徒探究テーマ一覧	60
(2) 1 学年（丹 BAL I & 総合的な探究の時間Ⅰ）	77
(3) 2 学年（探究Ⅱ）	78
(4) 2 学年（丹 BALⅡ）	79
(5) 3 学年（グローバル）	80
(6) 新聞記事	85

本校の資料館には、1930年（昭和5年）頃、本校の前身である柏原高等女学校の生徒が書いたと思われる研究論文が保管されています。「月の研究」「童謡の研究」「俳句の歴史」「現今の交通機関」「石油ランプ」等々、様々なタイトルで個人研究されており、それぞれ手書きで一万字ほどの論文にまとめられています。今から約100年前に、本校ではすでに「探究的な学び」が行われていました。その後、平成20年に「知の探究コース」が設置されるまで、「探究」という言葉が表に出ることはなかったのですが、「探究的な学び」は本校のDNAに確実に組み込まれており、コースの生徒達は、主体的に探究活動を進め、知識を深めてきました。令和元年には、文部科学省の「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」の指定を受け、コロナ禍で様々な制限はありましたが、探究的な学びを学校全体で進めてきました。そして、令和4年度には、文部科学省の「新時代に対応した高等学校教育改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受け、これからの時代の新しい学びのためのカリキュラム開発を進めてきました。その成果として、令和6年度からは、本県初の普通科新学科である「地域科学探究科」をスタートさせ、探究活動を中心に学びの深化を図る取組を全校展開しています。

これまで本校では、1年生の「探究Ⅰ、丹BALⅠ」で、探究活動の基礎・基本を学び、グループ研究で基礎実践をし、2年生の「探究Ⅱ」や、「丹BALⅡ」で、自分が最も関心がある地域社会の課題等について自らテーマを設定し、個人研究を進め、いろいろな発表会で丹波の課題や魅力を発信してきました。そして、3年生の「グローバル」では、課題研究の深化を目的として、調査分析、論文作成等に取り組んできました。

新学科では、これらに加え、「教科横断型探究」や「自己探究」等で論理的思考力や自己表現スキルを磨き、大学や地域で開催される事業にも、積極的に参加し、探究の成果を発表する等、生徒の活躍の場を増やしていきたいと考えています。

本冊子は、事業の最終報告書となります。この3年間、本校教職員は多くの時間を費やし、議論や試行錯誤を繰り返してきました。これは生徒だけでなく、教職員にとっても、これまでの自分達の教育を一から考え直す貴重な体験だったと考えています。今後も、これまで本校が培ってきた取組を、探究的な学びの「柏原モデル」として発展させていくとともに、新学科の魅力・特色づくりに教職員全員で取り組んでいきます。

最後になりましたが、本校の探究活動の発展、本事業の推進および新学科のスタートにあたり、ご支援、ご協力をいただきました文部科学省、兵庫県教育委員会、丹波市、関係大学、地域の皆様、同窓会の皆様に厚くお礼を申し上げます。今後とも、柏原高校の発展に引き続きお力添えをいただきますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

新学科の発足をお祝いするとともに、地域に根差した新しい高校像に期待します

高畑由起夫（関西学院大学名誉教授）

柏原高等学校では、「SGH アソシエイト校」や「地域との協働による教育改革推進事業（グローバル型）」等での実践をふまえて、「新時代に対応した高等学校改革推進事業」に取り組んでこられました。この間、コロナ禍等にも見舞われましたが、令和6年4月には新学科として地域科学探究科をスタートされました。運営指導委員としてその活動を拝見してまいりましたが、事業が順調に進展したのは何よりも教職員、ならびにコーディネーターの皆様の創意工夫と努力、さらにそれらの活動を支援された地域の方々のご協力の賜物と存じます。とくに地域と高校を結びつけるコーディネーター制度は、たんに柏原高校だけの改革にとどまらず、兵庫県の中山間地帯における高等学校のあり方に関するモデル作りにも参考になるのではないかと考えます。同時に、兵庫県や丹波市等に対しては、高等学校を地域行政の中に積極的に位置づけ、地方創成の一環として連携を強化すべき施策として推奨したいと思います。

一方で、こうした改革事業はむしろこれからが本番と言うべきであり、対応すべき課題もまた多く残されているようです。改革のさらなる発展を期待して、以下に、感じた課題をいくつか挙げたいと存じます。

まず、高校内部での課題については、探究学習でのリサーチやプレゼン・スキル向上のさらに次の段階として、他者の発表を理解しながら質疑を交わし、互いの議論を深めるディスカッション・スキルの向上があげられます。同時に、デジタル化社会の急速な発展にあわせて、情報リテラシーやデータ・サイエンス能力の向上等も必要です。可能であれば、従来型の図書室ではなく、図書+デジタル+ディスカッションの場を融合させたラーニング・コモンズのスペースの充実等が推奨されます。

また、今後、探究学習の成果やスキルを、上級生から下級生へ継承していくことができるように、カリキュラムを工夫することも重要かもしれません。他の高等学校の中には、積極的に学年間の継承を図っている事例もあり、是非、このあたりの工夫をお願いしたいと思います。さらに地域科学探究科での実践の進展にあわせて、そこで得られた成果を他の普通科クラスの授業に反映させていくことで、高校全体のレベルアップを図ることも欠かせません。

ここまでは高等学校内部の課題ですが、次に、学校外との連携がますます重要になってくるものと予想されます。とくにコーディネーターの皆様を通じて丹波市や周辺自治体・地域の住民の皆様との連携がさらに深まることを期待いたします。とくに柏原高校は120年を超える歴史によって、地域社会に広い人脈を有するとともに、周辺地域には豊かな地域財産や伝統文化が存在します。こうした地域特性を教育資源として取り込んでいくと同時に、高等学校から周辺地域への発信＝アウトプットしていく仕組みづくりが重要になってきます。さらに兵庫県全体でコーディネーター制度の普及・恒久化を進めることで、地方創成での一つの核として機能することが期待できます。

また、カリキュラムや探究活動等の進展にともない、先生方には最新の知識・スキルの修得・更新が必要になるかもしれません。そのためには、外部講師等による先生方への研修等も考慮すべきと考えます。この点、とくに兵庫県内の高等教育機関（兵庫教育大学や兵庫県立大学等）とのネットワークによる連携等も必要になってくると思います。もちろん、こうしたネットワーク・システムは柏原高校にとどまらず、県教育委員会等の主導によって、兵庫県全体で進めていくのが望ましいと考えます。

最後にあらためて、これまでの教育改革推進事業でのご努力と成果を高く評価するとともに、地域科学探究科のスクール・ミッションである、「進取創造 質実剛健 敬愛和協」の理念のもと、主体的に物事にチャレンジし、多様な価値観を理解し協働する力を備え、人類や地域社会に貢献できる人材の育成の実現に期待いたします。

1 実施状況

(1) 実施計画

〔事業の概要〕

○ 学際領域学科又は地域社会学科を設置する学校名・設置（予定）年度

公立・私立・ 国立・株立の別	学校名 (ふりがな)	学科の種類	設置（予定） 年度	決定
公立	兵庫県立柏原高等学校 (ひょうごけんりつかい ばらこうとうがっこう)	地域社会学 科	令和6年度	○

※学科の種類は学際領域学科又は地域社会学科の別を記載すること。

※設置（予定）年度は令和4年度、令和5年度又は令和6年度を記載すること。

※教育委員会等における決定を経ている等、組織として設置が決定している場合には、「決定」欄に○を付すこと。

○ 学校の詳細

課程別	新学科の 収容定員	学年制・ 単位制の別	学科の名称（決定している場合）
全日制	40×3学年=120人	学年制	地域科学探究科

※課程別は、全日制・定時制・通信制の別を記載すること。

○ 学校の特徴

創立126年の伝統があり、4万を超える卒業生は日本各地をはじめ世界で活躍するとともに、多くの卒業生が地元の教育、医療福祉、地元産業を中心的に支えている。本校の使命として、少子高齢化、過疎化が進む地域を支える人材を育成するとともに、地域課題の解決に向けて主体的にチャレンジする生徒の育成することが求められている。

○ 研究開発の概要

地域のポテンシャルを生かし、地域資源を活用した「地域を知る学び」を通じて、学ぶ楽しさを実感できる機会を提供する。これにより、生徒が自身の興味・関心のある分野について探究を深め、多様な価値観を理解した上で、学びの成果を外部へ発信していくことを目指す。

この取り組みを持続可能なものとするため、学校職員とコーディネーターが連携し、協働体制を構築するとともに、校内の支援体制を整備する。

また、教科横断的な年間プログラムを構築し、知識のネットワークを形成することで、生徒の主体的な学びを促進する。さらに、生徒が多様な価値観を理解し、共生社会において主体的に行動できる人材へと成長することを目的に、「自己理解」と「他者理解」をテーマとした学びのカリキュラムの在り方について研究を進める。

○ 当該学科における特色・魅力ある先進的な教育の取組について

現在の取組みと改編後の科目名称

	知の探究コース→地域科学探究科	普通科一般クラス
1 年	探究Ⅰ（１）→丹 BALⅠ（１）	総合的な探究の時間Ⅰ（１）
2 年	探究Ⅱ（２）→丹 BALⅡ（２）	丹 BALⅡ（１）
3 年	丹 BALⅢ（２）	総合的な探究の時間Ⅲ（１）
	グローバル（選択２）	

（ ）は単位数

「総合的な探究の時間」を本校独自のものとするため、①地域から学び地域で活動することを「丹波」と動詞化、②グローバル(GLOBAL+LOCAL)を言い換えて「ローカル」＝「丹波」から「丹 BAL」、③「丹波で Be A Leader」、④「丹波で Best Achievement Learning」という願いを込めて「丹 BAL」と呼ぶ。

【探究の基礎・基本】1年次「丹 BALⅠ」

探究の基礎である「問い」、「情報収集・情報処理」、「分析・考察」、「まとめ・発表」を、それぞれ、グループでの簡単な探究的活動を繰り返す中で、実践的に探究の基礎を身につける。

また、ある程度制限されたテーマの中で探究の手法を学ぶために、SDGsから問題を焦点化し、丹波地域の「丹波市ゼロカーボンシティ宣言」を題材に、丹波市役所の協力のもと、基礎実践探究を展開する。

探究した内容については、記録集にまとめ次年度以降に継承できるようにする。

【探究活動の応用実践】2年次「丹 BALⅡ」

「丹 BALⅠ」で身につけた探究の基礎・手法を活用し、自分の興味関心に基づいたテーマを設定して探究活動を進める。

1年次はグループで研究進めるが、2年次では、より自己の興味関心に基づいて探究するため、個人研究に取り組む。

探究した内容については、記録集にまとめ次年度以降に継承できるようにする。

【学びの深化と発表】3年次 「丹 BALⅢ」「グローバル」

2年の探究をさらに継続・発展させたい生徒が選択できる科目として設置する。

それぞれの生徒が自らの興味・関心や進路に応じ、「グローバル」（世界へ発信）、「自分探究」（自分の進路へとつなげる）、「地域探究」（地域課題の解決へ向けさらに研究を進める）の3つのうちのどれかと関連したテーマを設定し、より深化した研究に取り組む。

その中で、英語によるプレゼンテーション、ディスカッションに対応できる技能を磨き、海外の高校生（台湾、韓国、カンボジア等）とオンラインで情報発信、意見交換をするなどして国際社会で活躍できる素地を養う。また、海外及び全国の地域探究型の高校とオンラインで結び、グローバルサミットを開催することで、高校生同士が互いに切磋琢磨して学びを深化させる場を設定している。探究した内容については、記録集にまとめ次年度以降に継承できるようにする。

※探究活動発表会を R5 年度より新たに実施

「地域課題から世界を考える日」（全校発表会）

「知の探究」発表会を丹波の森公苑ホールを利用し開催することにより、地域をはじめ全国及び世界に本校の探究活動を公開し、ライブ配信も実施する。

【事業の目的等】

○ 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校を取り巻く状況の分析、学際領域学科又は地域社会学科を設置する必要性

本校の所在する丹波地域は、現在少子高齢化、過疎化、医師不足、基幹産業である農業の衰退、森林の放置、それを遠因とした土砂災害の発生、農作物への鳥獣被害など様々な今日的課題を抱えている。

一方、丹波地域には、豊かな自然や景観、歴史、あるいは丹波大納言小豆や黒大豆など、日本を代表する農作物や、世界的にも珍しい恐竜の卵殻化石が発掘され大きな話題となった地層（丹波篠山層群）など、世界に誇るべき地域財産を有している。

本校は、地域の進学校として、127年の歴史があり、卒業生も4万人を超え、丹波地域はもちろん、世界各国で活躍する多くの人材を出してきた。しかしながら、少子高齢化の影響を受け、丹波地域の人口が減少する中、生徒が半分以上に激減し、最大1学年12クラスが、5クラスとなっている。

一方で、世界ブランドの農作物等の地域資源に魅力を感じ、丹波地域へ移住する人は年々増え、令和2年度には前年度から100人増の225人となった。新たなビジネスを展開している人、自分らしい生き方を求める人など、今までの丹波市にはなかった多様な価値観が共存し、現在の丹波市の魅力を形成している。

本校は、平成20年に理数系の学びに特化して「普通科理数コース」を、理数系と文系の学びを融合させた「知の探究コース」として改編し、それ以降、探究活動を教育課程の中に盛り込むことで学校の特色化を図ってきた。本校が探究活動で培ってきた、地域との協働した学びは、生徒の主體的な学びの場となり、学校が活性化する源として、本校の中心的な活動として現在まで牽引してきている。そして「知の探究コース」は、令和6年度より「地域科学探究科」として、今まで以上に探究活動を充実させたカリキュラムをもつ学科へと生まれ変わる。本校が培ってきた学びを、充実・発展させることで、今まで以上に地域に信頼され、生徒の主体性を育てる学びを展開する。

【具体的な取組】令和5年度実績

- ・自然の力で心も体も健康に～地域の森林を活かした健康づくり～
- ・殺処分を減らすためにできること～地域猫と保護猫～
- ・燃えるごみを減らすために～生ごみについて考える～
- ・QRコード決済で地域を活性化しよう！
- ・子ども食堂

急速なグローバル化やICTをはじめとする技術の進展や少子高齢化の影響等、ますます変化が激しく予測困難な時代を迎える中で、社会の変化に柔軟に対応し、自らの力で新しい社会を切り拓く力を育成する高等学校であるために、地域との協働による高等学校教育改革推進事業により実施した研究開発を継続し、発展させる必要がある。そのために、生徒自らが地球規模の視点に立った課題や地域の魅力に着目し、持続的な発展や価値を創出するための資質能力を育成していく。

「知の探究コース」で培ってきた学びを発展させ、本質的な協働と個人の行動を重視した新学科「地域科学探究科」として、「多様な価値観を共有する人材育成」を目標に、地球規模で活躍する人材を育むことが本校の使命であると考える。

○ 学際領域学科又は地域社会学科における取組の目的・目標（学際領域学科又は地域社会学科における教育を通じて育成を目指す資質・能力を含む）

① 柏原高校のめざす生徒像

- ・主体的に物事にチャレンジする生徒
- ・多様な価値観を理解し、協働する生徒
- ・共生社会における地域の課題解決に寄与する生徒

② 取組の目的・目標

- ・地域課題を理解し、活性化や課題解決に向け積極的に関わることのできる資質能力を養う。
- ・他地域との比較や、世界的な課題との関連を探る活動を通じて、多様な価値観を有する共生社会を理解できる資質・能力を養う。
- ・生活体験や学び、地域交流から、他者と自分の差異に気づき、差異を生かす方法を考えることができる資質・能力を養う。

③ 育成を目指す資質・能力

コア教科・科目「丹 BAL」で課題解決型学習を推進し以下の力（例）を育成する。

	丹 BAL I	丹 BAL II	丹 BAL III
地域理解力	◎		
発案力	◎	○	
実践力		◎	○
関係構築力	○	◎	○
表現力	○	◎	◎
チャレンジ精神		○	◎
リーダー性	○	○	◎

※「地域探究科学科」の学びを展開していく中で、研究推進部を中心にコーディネーターや地域の方々の意見を聞きながら、育成したい能力については今後も見直しをはかっていく。

④ カリキュラムマネジメント

各教科の学びの設計において以下の内容を実践する。

〈特に育むべき資質・能力〉

- ・答えが一つとは限らない問いに対し、自ら解を求める思考力、判断力、表現力等の能力
- ・主体的に多様な人と協働して学ぶ態度（主体性・多様性・協働性）

〈年次進行〉

- 1 年次 探究活動の手法を学ぶ（課題の設定）
- 2 年次 探究活動の実践（課題の分析、解決策のための立案と実行）
- 3 年次 発表、キャリア形成へのさらなる行動

〈探究型学習の設計〉

教育目標からの目指す資質・能力の設定→評価方法の設定 → 授業計画の作成
 →授業案の作成と授業の実施方法の検討→ 授業関係やの役割の明確化
 学校の教育活動全体を見据え、対話を重視したシステムを構築する。

【実施体制】

○ 管理機関における実施体制や事業の管理方法

【事業実施に向けた経緯】

本県では、「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づき、県立高等学校に関する具体的な取組の考え方と方向性を示す「県立高等学校教育改革実施計画」を策定し、計画的に教育改革を進めてきた。

具体的には、「第一次実施計画」策定（平成 11 年度）以降、「学びたいことが学べる学校づくり」を一貫した基本理念とし、特に、普通科学年制においては、コースの設置に加え、複数の学校設定科目を設定し、生徒の興味・関心を重視した入試を行う本県独自の特色類型を設置してきた。この結果、専門学科の併置校を除く全ての普通科学年制高等学校にコースまたは特色類型のいずれかを設置するに至っている。（コース 15 校、特色類型 55 校）

普通科新学科については、令和 4 年 3 月に策定した「県立高等学校教育改革第三次実施計画」において、設置の方向性を明確に打ち出すとともに、普通科コースの改編を軸とした全県規模の配置を計画的に推進することとしている。

県立御影高等学校と県立柏原高等学校は、普通科コースの内、いち早く普通科新学科への改編を意識したカリキュラム等の研究を組織的に行っており、高校教育課とも数次にわたって調整を進めてきた経緯があることから、2 校を申請することとなった。

令和 4 年度より入試方法の概要を含めた検討を行った上で公表し、1 年間の周知期間を経て、令和 6 年度に普通科新学科を設置する。

【事業の実施体制】

①「普通科新学科推進委員会（仮称）」の設置

- ・普通科新学科の設置校及び設置を目指す高等学校（15 校程度）を構成員とする「普通科新学科推進委員会（仮称）」を、高校教育課主導で設置
- ・定期的に研修会等を開き、各校の改編に向けた進捗状況を確認するとともに、探究活動を軸としたカリキュラムの展開等について共有
- ・本事業指定校には、モデル校として中心的な役割を付与

②本事業指定校が開催する運営指導委員会等への参画

- ・本事業指定校の運営指導委員会等に、高校教育課長が委員として参画

③本事業指定校に対する県独自の支援

- ・探究活動に特化した特別教室の整備（ICT 環境等の充実）
- ・担当指導主事による継続的な指導助言

④普通科新学科に関する周知

- ・普通科新学科の特長等に関する組織的な広報の展開（HP 等の充実）

【事業の管理方法】

①本事業指定期間中

- ・運営指導委員会における進捗状況の把握及び指導助言
- ・「普通科新学科推進委員会（仮称）」における報告の義務化

②本事業指定終了後

- ・普通科新学科設置後の成果報告を義務化
- ・本事業終了後の人的配置の検討

○ 管理機関における事業全体の成果検証、評価のための体制、考え方

【事業評価の体制】

① 運営指導委員会での検証

- ・ 大学教授等の有識者による、学術的な視点からの継続的な評価
- ・ 外部委員等による、客観的な視点からの継続的な評価
- ・ 高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な評価及び指導

② コンソーシアムでの検証

- ・ コンソーシアム構成員による、多角的な視野からの評価
- ・ 高校教育課長をはじめ、担当指導主事による継続的な関与及び助言
- ・ 校内の教職員及び生徒による、計画的な自己評価

③ 「普通科新学科推進委員会（仮称）」での検証

- ・ 普通科新学科設置校及び設置を目指す高等学校を構成員とする委員会での相互評価
- ・ 指導主事による各校の成果に関する相対的な評価
- ・ 探究の指導についての研修会の実施

④ 兵庫県教育基本計画に基づく検証

- ・ 「ひょうご教育創造プラン（兵庫県教育基本計画）」に基づく年度末評価の実施

【事業評価の考え方・観点】

① スクール・ポリシーの適切な設定

- ・ 生徒に身につけさせる資質・能力の明確化
- ・ 資質・能力を育成するために必要な教育課程に関する方針の明確化
- ・ 入学時に期待される生徒像の明確化

② 育成すべき資質・能力に関する評価方法の適切な設定

- ・ 生徒の目標に対する到達度（ポートフォリオ、ルーブリック等）
- ・ 生徒の興味・関心・意欲等に関する教職員の理解度
- ・ 生徒や教職員、協働者に関するコーディネーターの理解度

③ 3年間を通じた体系的なカリキュラムの設定

- ・ 教育目標に則した教科横断的で体系的なカリキュラムの設定
- ・ 学校設定教科を軸とした、探究活動中心のカリキュラムの設定

④ ICT 等を活用した授業設定

- ・ BYODをはじめとする情報端末機器を有効に活用した授業の展開
- ・ 急激な社会変化等に影響を受けにくい学習環境の構築

⑤ コーディネーターの有効な活用方法の検証

- ・ コーディネーターの得意分野を生かした学校組織での活用
- ・ コーディネーターによる研究機関や地域社会との接続点の増加
- ・ コーディネーターを軸とする学校内外の協働体制の構築
- ・ コーディネーターの関与によるワークライフバランスの組織的な担保

【具体的な評価指標（例）】

高校の魅力・特色を高校選択の理由にした生徒の割合

【第3期ひょうご教育創造プラン指標】

区 分	R 2 年度	R 3 年度	R 4 年度	R 5 年度	最終目標
目標	83.0%	84.0%	85.0%	86.0%	87.0%
実績（見込）	82.5%	79.3%	78.6%	77.4%	

○ 学際領域学科又は地域社会学科を設置する高等学校における事業の管理方法

①校内組織の改編

- ・コーディネーターを校務分掌に位置づけ、組織としての役割を明確化
- ・校内の教育活動全体に関するコーディネーターの関与を充実
- ・職員会議等において、事業内容に関する情報を共有化

②普通科新学科設置検討委員会の設置

- ・普通科新学科設置に向けた準備委員会を校内に立ち上げ、コーディネーターを含む委員により、組織的に改編を推進

③運営指導委員会の開催

- ・運営指導委員会を年間3回以上開催し、専門的な知見を有する大学関係者や企業関係者や自治体関係者、地域NPO等の委員から助言を受けながら、校内の教育活動に対して進行管理、評価、指導を実施
- ・委員会の構成員である県教育委員会事務局から、県全体の施策等を踏まえた指導助言の実施

④コンソーシアム運営委員会の開催

- ・コンソーシアム連絡会を定期的に開催し、カリキュラムについて、各専門分野の立場から必要な助言を与え、協働体制を構築
- ・探究活動に関する情報やデータの提供や、フィールドワークやインターンシップ等の体験的な学びやICTを活用した海外との交流の機会を提供
- ・カリキュラムの実施にあたって、必要に応じて、人的、物的な支援を展開
- ・実行されたカリキュラムの成果に関する定期的な報告を受け、必要な助言を付与
- ・普通科専門学科としての特色ある教育課程の推進のため、各種分野において優れた知識・技能を有する社会人等を学校設定教科・科目、総合的な探究の時間等の講師として活用する特別非常勤講師を配置
- ・本県知事部局の国際交流課・国際経済課等との協力のもと、指定校と国内の大学や企業、海外の教育機関との連携強化や、本県SSH指定校等で組織する「兵庫『咲いテク』事業推進委員会」との連携を推進する事業の支援・拡大及び成果の普及を展開

※①～④を関連付けることにより期待される相乗効果

- ・探究活動は、専門的かつ広範囲的な内容を伴うことから、従来の高等学校の教育環境のみでは効果的な実施が困難な状況であるが、多方面の専門家や組織が、事業実施校の教育目標や実施内容に関する情報等を共有することにより、人的支援及び物的支援等を受けやすくなり、内容の深い学びを機能的に実現する可能性が高まる。
- ・生徒が個々に発案して進める探究活動を、校内外の様々な場面で公開していくことにより、生徒の課題意識が社会全体の課題とリンクしやすくなり、より大きな支援等を得た教育活動となり得る可能性が高まる。

○ 管理機関及び申請校における研究開発の実績（申請校が新設校の場合、管理機関における実績のみを記載）

管理機関における研究開発の実績]

学校名	指定年度	指定機関	研究主題
神戸長田 尼崎小田 宝塚北 三田祥雲館 明石北 加古川東 小野 姫路西 姫路東 龍野 豊岡	平成 16～令和 7 年度 令和 4～令和 8 年度 平成 17～令和 7 年度 令和元～令和 5 年度 平成 21～令和 8 年度 平成 22～令和 6 年度 平成 18～令和 8 年度 令和元～令和 5 年度 令和 2～令和 6 年度 令和 2～令和 6 年度 平成 25～令和 9 年度 平成 18～令和 8 年度	文部科学省	スーパーサイエンスハイスクール 将来の国際的な科学技術関係人材を育成するために、先進的な理数系教育を実施する高等学校等を指定し、理数系教育に関する教育課程等に関する研究開発（実践的な研究を含む。）を行う。
姫路西 兵庫庫 伊丹 国際	平成 26～平成 30 年度 平成 27～令和元年度 平成 27～令和元年度 平成 27～令和元年度		スーパーグローバルハイスクール グローバルな社会課題を発見、解決できる人材やグローバルなビジネスで活躍できる人材育成するため、質の高いカリキュラムの開発・実践を行う。
兵庫庫 生野 柏原 佐用 村岡	令和 2～4 年度 令和元～3 年度 令和元～3 年度 令和 2～4 年度 令和 2～4 年度		地域との協働による高等学校教育改革推進事業 市町村・高等教育機関・産業界等との協働によるコンソーシアムを構築し、地域課題の解決等の探究的な学びを実現する取組を行う。
御影 柏原 篠山鳳鳴 姫路飾西	令和 4～6 年度 令和 4～6 年度 令和 5～7 年度 令和 5～7 年度		新時代に対応した高等学校改革推進事業 学際領域学科又は地域社会学科等の設置に向けてのカリキュラム開発や実施体制の開発等、普通科改革の実現に資する先進的な取組を行う。

[申請校（兵庫県立柏原高等学校）における研究開発の実績]

平成 26 年 4 月～平成 31 年 3 月

スーパーグローバルハイスクールアソシエイト校に指定

平成 30 年 4 月 ひょうごスーパーハイスクール指定

平成 31 年 4 月～令和 4 年 3 月

文部科学省「地域との協働による教育改革推進事業（グローバル型）指定

○ 運営指導委員会の体制

所 属	氏 名	主な実績
兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長	中瀬 勲	学識経験者
関西学院大学 名誉教授	高畑 由起夫	学校教育に専門的知識を有する
福知山公立大学 准教授	杉岡 秀紀	〃
東京大学大学院 教授	藤江 康彦	〃
丹波市観光協会 会長	足立 環	関係機関の責任者
丹波市教育委員会学校教育課 副課長	尾松 正章	関係行政機関の職員
兵庫県教育委員会高校教育課長	倉橋 良太	管理機関

○ 運営指導委員会が取り組む内容

年間3回程度運営指導委員会を開催し、各委員の専門性を生かして、令和4・5年度は、新学科設置に向けたカリキュラム開発、コーディネーターと協力した校内の体制整備、コンソーシアムの構築や連携、中学校等への周知・広報等の進捗状況、中学校等への広報活動等について助言を行う。令和6年度は、学科の設置年度となるため、入学生の状況等を把握し、カリキュラムの実施や関係機関との連携の深化等について、具体的な助言を行う。また、学校内外の継続的な連携・協働構築に向けての具体的な提案を行う。

〔学際領域学科又は地域社会学科における取組〕

- 学際領域学科又は地域社会学科におけるカリキュラムや教育方法等の特色・魅力ある先進的な教育の内容（学校設定教科・科目の詳細は別添１「学校設定教科・科目の設定に関する説明資料」に記載。）

１年

「探 BAL」（総合的な探究の時間）で、探究の基礎である「問い」、「情報収集・情報処理」、「分析・考察」、「まとめ・発表」を、それぞれ、グループでの簡単な探究的活動を繰り返す中で、実践的に探究の基礎を身につける。

また、ある程度制限されたテーマの中で探究の手法を学ぶために、SDG s から問題を焦点化し、丹波地域の「丹波市ゼロカーボンシティ宣言」を題材に、丹波市役所の協力のもと、基礎実践探究を展開する。

探究した内容については、記録集にまとめ次年度以降に継承できるようにする。

２年

「丹 BAL I」で身につけた探究の基礎・手法を活用し、「丹 BAL II」で自分の興味関心に基づいたテーマを設定して探究活動を進める。

１年次はグループで研究進めるが、２年次では、より自己の興味関心に基づいて探究するため、個人研究に取り組む。

探究した内容については、記録集にまとめ次年度以降に継承できるようにする。

また、「ポスター英語（教科横断型探究Ⅰ）」（探究に特化した学校設定科目）に取り組むことにより、論理的思考力や多角的視点を身につけ、多様な価値観を有する共生社会における様々な課題を解決していく力を育成する。

３年

「丹 BAL II」で探究してきた内容を「丹 BAL III」で深化させるとともに、大学等で開催される探究発表会に参加し、探究した内容を的確に伝えられるように、発表の構成の工夫、資料や機器の効果的な使い方等を実践的に育成する。あわせて、発表だけではなく、発表者の探究がより深まるような質問をしたり、助言をしたりするなど、聞く力も実践的に育成する。また、３年間の探究学習の集大成として、７月に「知の探究」発表会を丹波の森公苑ホールにて開催し、地域をはじめ全国、世界に配信する。

「丹 BAL III」において、「探究発表」では３年間の集大成としての探究発表の場を設け、表現力を培うことにより、研究や報告のスキルを向上させる。「自己探究」では、自己理解を深め言語化することにより、自分に合った効果的な表現スキルを身につけ、発言力及び発信力を育成する。「教科探究」では、３年間の集大成として学んできたことを活用して、自分の興味関心に基づいた探究活動を実施することにより、主体的・論理的思考力と多角的視点の成長を再確認する。

この他、「教科横断型探究Ⅱ」（探究に特化した学校設定科目）では、論理的思考力や多角的視点を身につけ、多様な価値観を有する共生社会における様々な課題を解決していく力を育成する。探究をさらに深化させる。

研究した成果は記録集を発行することにより、次年度以降の生徒が研究内容を確認できるようにする。

○ コンソーシアム等の関係機関等との連携・協力体制の構築の考え方・方法

これまでの探究活動からの協力体制を発展させる。新学科では生徒の興味ある課題に対して、持続可能な取組とするためにコンソーシアムや OB のつながりを活かした協働体制の構築を目指す。また、令和 4 年度より兵庫県版コミュニティスクールの地域連携強化校として指定を受け、学校運営協議会を立ち上げることで、コンソーシアムに参加する団体等との関係がさらに強化された。

① 生徒の教育活動の支援体制

生徒が探究活動を進めるにあたり、地域の状況や課題の情報提供や共有、講演会の協力、フィールドワークの支援などを行う。また、課題解決型学習時に、課題解決のために、専門家や自治体等の組織につなげ、協働した取組により生徒の探究活動を支援する。

(具体的な支援内容)

自治体・商工会・観光協会等

- ・丹波市の姉妹都市（米国ワシントン州セント市・オーバン市）との高校生地域活性化会議及び交換留学の実施
- ・各機関からの研究テーマに関する情報、データ等の提供 など

海外の大学、高校、NPO

- ・国際交流の推進、観光振興に関する研究
- ・ICT を活用した共同研究 など

② 地域における探究活動が持続可能な体制づくり

地域の活性化をはじめ、関係者の利益を尊重した持続可能な体制をつくる。

- ・令和 7 年度以降もコーディネーターを配置できる環境づくり
- ・自治体等の継続的な人的支援
- ・企業の社会貢献事業（CSR）等の人的物的支援の検討
- ・生徒が主体的にフィールドワークに行ける校内体制および地域体制の構築

○ コンソーシアムの構成員

所属	氏名	主な実績
丹波市	林 時彦	丹波市長 探究授業講師派遣
丹波市教育委員会	片山 則昭	丹波市教育長 職員研修会支援
丹波県民局	糟谷 浩行	丹波県民局長 探究活動支援
丹波市商工会議所	篠倉 庸良	会頭 探究活動講師・支援
丹波市観光協会	足立 環	会長 運営指導委員
丹波医療センター	大野 伯和	院長 医療セミナー講師
丹波市国際交流協会	十倉 直子	会長 国際交流の支援

※必要に応じて行を追加すること。

○ 配置するコーディネーターの属性や役割

所属	氏名(役割)
NP0 法人 imagine 丹波	鴻谷 佳彦 (探究授業推進・職員研修・関係機関調整)
丹波市市民活動支援センター	一宮 祐輔 (職員研修・関係機関調整)

当該者の主な実績

NP0 法人 imagine 丹波 鴻谷 佳彦
 ・文部科学省での運営指導委員
 ・探究活動における特別非常勤講師 (県内 4 校実績)
 丹波市市民活動支援センター 一宮 祐輔
 ・探究活動における特別非常勤講師
 ・丹波市内の高校による「モンブランプロジェクト」の支援活動コーディネーター

※ 7 行以内で記載すること

コーディネーターが取り組む内容 (勤務形態を含む)

1 年目

学校職員やコンソーシアム等の地域関係者との関係づくりを優先して実施し、令和 6 年度の新学科設置に向けた準備ならびに、コーディネーターの仕事の整理。

- ①地域や学校の抱える課題の言語化、可視化、共有化
- ②コアとなるチームの編成
- ③推進体制づくりの原案づくり
- ④「丹 BAL」を中心とした教科科目の参画授業を試験的に実施し、コーディネーターが探究活動にどのように参画していくかを研究する。

2 年目

(鴻谷氏、一宮氏は 1 日 7 時間 52 日、久保氏は 1 日 4.5 時間 104 日の勤務)

1 年目の課題を分析し解決策を検討する。また、新学科の探究カリキュラムの設計提案及びカリキュラムマネジメントの提案。

- ①地域と学校の関係構築
- ②探究活動における手法の提案
- ③関係機関との細かな調整
- ④学校外での学びの醸成を推進
- ⑤探究活動上の生徒の悩み等へのアドバイス

3 年目 (新学科の設置)

- ①探究活動における地域との関係構築及び関係強化
- ②探究活動における手法の提案
- ③探究活動における生徒へのアドバイス等

今年度は非常勤とするが、今後は学校に常駐して、教員とともに関係機関との調整、授業において生徒の支援を行う。また、学校内外の協働体制を設計する中心となる。

○ 学際領域学科又は地域社会学科の設置及び設置に向けた検討に関する生徒、保護者、地域等への説明の実施

地域社会学科の設置は令和6年度であるため、令和5年度は以下の広報活動を行なった。

①学科の教育内容をまとめた広報用リーフレットとポスターの作成

中学生や保護者、地域の方に対して、教育活動や行事等を整理し紹介した。また、教育活動に関わっていただけるよう理解を促した。

ポスターの掲示には、学区内の駅やスーパー、公民館、商業施設等の多くの方に周知できる場所を選定して掲示した。

②オープン・ハイスクール等（中学生、保護者、地域への広報）

年間3回実施

第1回（7月）中学校訪問

生徒が出身中学校へ出向き、現在行っている探究活動の実践を発表する。あわせて、学校紹介を行う。

第2回（8月）オープン・ハイスクール・新学科説明会

学校紹介、探究活動等、高校の学びについてパネルディスカッションの実施。「国際交流について」、「先輩と語る」などの企画を生徒が中心になって実施し、学校を紹介した。

第3回（10月）秋のオープン・ハイスクール、進学相談会

学校紹介、探究活動の紹介、「高校生と語ろう（進学相談）」などの企画を、生徒が中心になって実施した。

③スマートフォン向けWEBページの作成

今後の教育活動を紹介できるようなサイトとして業者委託をする。

④学校関係者への説明

3月 入学者説明会（新入生、保護者への説明）

4月 PTA総会での説明（保護者への説明）

6月 中高連絡会（中学校教員への高校説明）

7月 学校評議員会

9月 学校説明会（中学生、保護者、中学教員への高校説明）

10月 教諭の市内中学校訪問（進路担当、学年担当に説明）

⑤探究活動発表会での広報

1月 地域課題から世界を考える日（校内発表会）

3月 「知の探究」発表会（丹波の森公苑ホール）

全国指定校、市内各学校、保護者、ライブ配信

【実施計画】

○ 3ヶ年の実施計画の概要

1 年目

現行の内容について、継続実施。

① 1 年生については、新たなテキストや講演会等により探究の基礎を学ぶ。

- ・ 外部講師による丹波の魅力再発見 自治体の施策を学ぶ（地域を知る）。
- ・ 地域の魅力や課題の中から、自分の興味あるテーマを設定し、フィールドワーク等の活動から探究を深めていく。

② 2 年次の探究活動を、前半は 1 年次からの継続で地域活性化策のまとめ（地域を深め創る）、後半を台湾（沖縄）研究として、テーマを防災、観光、平和等に設定し探究を進める。自治体の対応の違いを比較する。また、地域課題や自己の将来に向けて研究を進める。

③ 学校設定科目の研究「(仮)自分探究」「(仮)地域探究」「グローバル」を設定。

新たな科目設定であるので、新学科設置検討委員会(仮)により現在の教科の授業との関連をどのようにはかるか、また、総合的な探究の時間や、LHR 等で行っている内容とも関連させ、実施時間を適切に設定できるように研究する。

カリキュラム開発について、コンソーシアムである大学や、管理機関である県教育委員会等と連携し指導助言を受ける。学校行事（オープン・ハイスクール、修学旅行、進路探究 WEEK、インターンシップ、地域人材養成セミナーなど）との関連もはかり事前事後の学習につながるよう探究学習をプログラムする。

2 年目

① 3 学年で同一の曜日(木曜)に探究の時間を設定。LHR の時間と連続にして、課題研究、レポート作成、フィールドワーク、講演会、発表会等が実施しやすい時間割にする。

② 令和 4 年度に整備した「探究ルーム」の効果的な活用を研究するため、様々な活動で探究ルームを活用する。また、より効果的な探究活動が行えるよう、「探究ルーム」の充実をはかる。

③ 新学科の教育課程の枠組みを決定し全体計画作成を作成する。

④ 「丹 BALⅢ」、「自己探究」、「グローバル」の内容について研究する。

⑤ 学校設定科目「ポスター英語」「教科横断型探究」の内容について研究する。

⑥ 県教育委員会へ学校設定科目の届出

3 年目 新学科設置初年度

① 1 年次より「地域科学探究科」スタート

② 関係機関の連携協力による新たなカリキュラム（初年度：1 年生）の実施

③ 新たなカリキュラム実施（2 年生・3 年生）に向けての校内体制の準備

○ 今年度の計画の内容

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	探究学習ガイダンス（１年） テキスト利用の探究手法講座（１年） 探究学習オリエンテーション（２年） 「教科横断型探究」プロジェクト会議	丹波新聞社 大学関係者
5月	授業公開週間、研究授業 「教科横断型探究」プロジェクト会議	地域の関係機関等 丹波市、丹波篠山市教育委員会、中学校
6月	全国コーディネーター研修 「教科横断型探究」プロジェクト会議	
7月	出身中学プレゼンテーション 学校運営協議会（コンソーシアム委員会） 「教科横断型探究」プロジェクト会議	丹波市、丹波篠山市教育委員会、中学校 市役所、大学、地元企業、観光協会、商工会議所等、 学識経験者、関係行政機関等
8月	オープン・ハイスクールでのプレゼン インターンシップ フィールドワーク引率 東京大学実習体験 「教科横断型探究」プロジェクト会議 運営指導委員会	丹波市・丹波篠山市教育委員会、 小学校、中学校、子育て支援センター 地元企業、観光協会、商工会議所等、大学 福知山公立大学、関西学院大学、東京大学等
9月	地域連携講師の授業（１年） 進路探究WEEK 授業公開週間 「教科横断型探究」プロジェクト会議	市役所、丹波医療センター等 チーたんの館、水分れフィールドミュージアム等 卒業生による講義、講演、模擬授業等

10 月	秋のオープン・ハイスクール 市内中学校訪問（新学科説明） 「教科横断型探究」プロジェクト会議	関係中学校、教育委員会等
11 月	全国コーディネーター研修 「教科横断型探究」プロジェクト会議	
12 月	福知山公立大学（田舎力甲子園）生徒発表	福知山公立大学 関係機関等 福知山公立大学、関西学院大学、甲南大学、 東京大学等
1 月	地域課題から世界を考える日 運営指導委員会	日頃の探究活動の成果を発表 学識経験者、関係行政機関等
2 月	探究発表会（県内他校） 3年記録集発行	神戸コンベンションセンター
3 月	「知の探究」発表会（丹波の森公苑） 全国フォーラム（東京） 全国コーディネーター研修（東京） 学校運営協議会（コンソーシアム委員会） 1年2年記録集発行	報告、意見聴取

○ **事業の進捗状況の定期的な確認や改善の仕組み（事業のアウトプットやアウトカムの考え方、目標指標の設定は別添２「目標設定シート」に記載。）**

年３回程度計画している運営指導委員会、コンソーシアム運営委員会において事業の進捗状況を確認する。その中で改善策を検討する。オンライン等も適切に活用して、確認できるようにする。

①生徒の探究意欲の向上

グループ内での発表、学年での発表、発表会等において、課題への主体的な取組や視野の広まりが見られたか、また、生徒が発表する場が適切に設定されているかどうかを評価する。探究スキルの向上をはじめ、自己の興味関心に基づき主体的に探究に取り組む生徒の変容を評価する。

②教員の探究指導スキルの向上

探究活動を効果的に進めるために、生徒の探究スキルを育成する中で、教員自らも探究指導のポイントをおさえて活動を見守ることにより、自らの指導力を向上させることができるプログラムを構築する。

また、教科横断型探究の内容を検討するプロジェクト会議を立ち上げ議論する中で、各教科の授業においても、探究的な学びを展開できる指導力を、さらに向上できるようにする。

③外部機関との連携

大学や関係機関との連携が適切に実施できているかをみる。特に、研究授業や発表会を実施し、オンライン等を有効に活用して有識者より助言をいただくこと等を積極的に実施する。

コーディネーターを的確に活用することで、探究活動の渉外等が教員の過度な負担に繋がることを防ぎ、探究学習が持続可能な体制を構築する。

④中学生、保護者の視点

新たな学科が、生徒の成長、学校の発展につながり、柏原高校で学びたい、学ばせたいという魅力あるものになっているかどうかを評価する。

中学校での説明会、オープン・ハイスクール等でのアンケートの実施やWEB ページを活用した意識調査の実施の仕組みを検討する。

⑤カリキュラムマネジメント

新学科設置により、探究に特化した科目だけではなく他の科目の授業においてどのように探究と関わっていくのかを、プロジェクト会議等で議論を深める。本校生に身につけさせたい力や、どのように進路実現をさせたいのか等について議論することで、学校の教育活動が効果的、機能的に連携できる体制を構築する。このことにより、教員が一丸となり教育活動に向かう変容を評価する。

〔成果の普及のための仕組み〕

○成果普及のための方策

- ①全国フォーラムでの発表
- ②県教委主催の各種研修会での先行事例として報告
- ③地域住民、保護者、中学生への広報、発表会等の活動
 - ・丹波の森公苑ホールにおける「知の探究」発表会
 - ・ホームページへの掲載
 - ・学校だより、探究通信(仮称)の発行
 - ・各探究活動発表会
 - ・オープン・ハイスクール、出身中学校でのプレゼンテーション
 - ・「地域課題から世界を考える日」
- ④大学等が実施する発表会、研究会への参加
- ⑤県民局主催丹波地域ビジョン推進委員会への参加
- ⑥全国、世界で活躍する卒業生を巻き込んだ、事業への理解と協力体制の構築

〔国の指定終了後の取組継続のための仕組み〕

○コンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくり

地域社会学科の特色ある学びを支えるのは、コンソーシアムを構築する機関等との継続的に連携が続く仕組みづくりである。国の指定期間内で、それぞれの機関と連携・協働を強化し、学校内の学びから学校外での学びへと発展させた「地域全体の学び」となるよう更なる仕組みを構築する。

○コーディネーター機能の維持

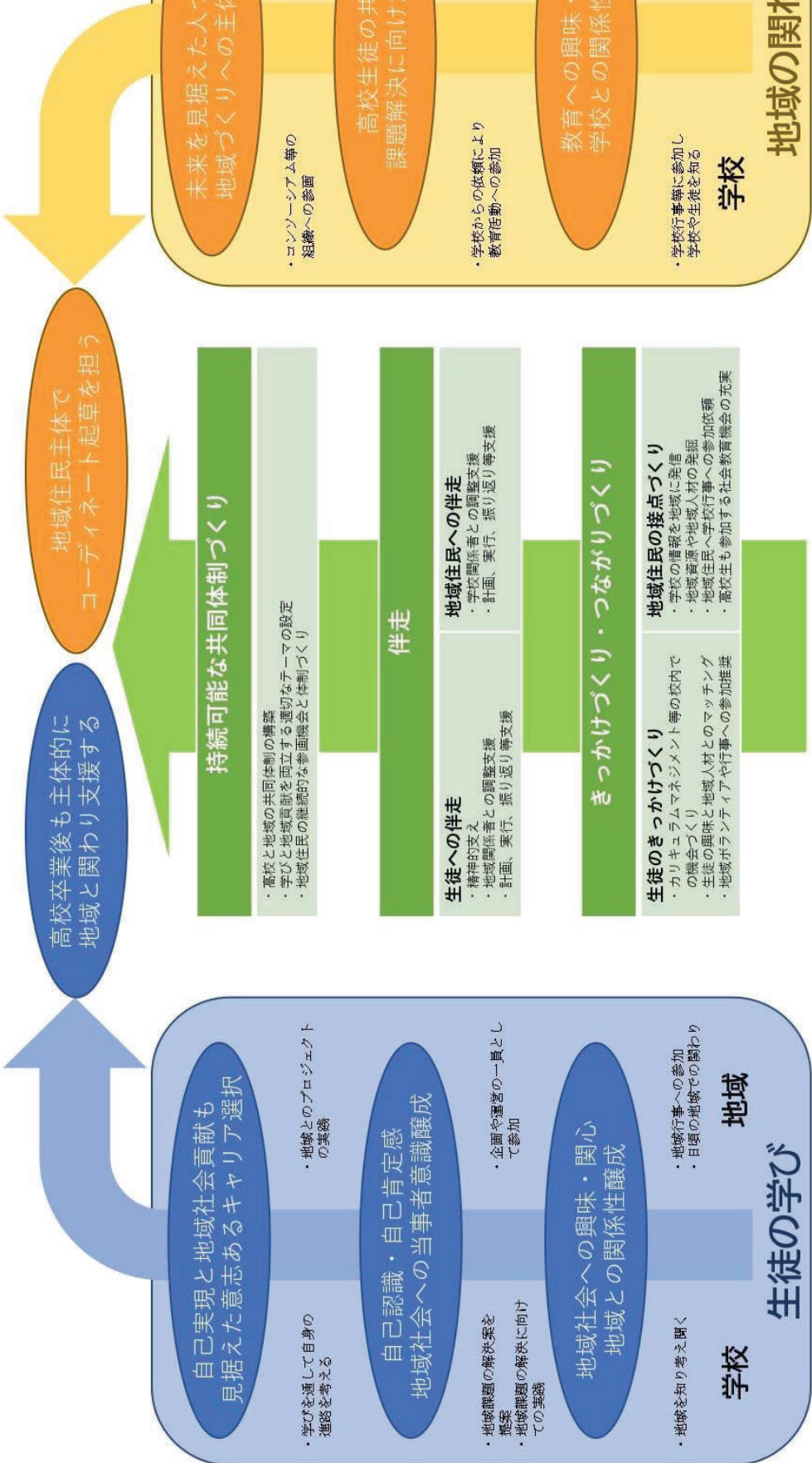
指定期間後のコーディネーター機能の維持については、

- ①コーディネーター加配に関する予算の確保
- ②教員のコーディネーター機能の移行
- ③企業協力による人員配置 等

の方策を含めて、コーディネーターの望ましいあり方について指定期間中に検討し、方向性を決定する。

地元自治体の「地域づくりセンター」から職員を派遣して、コーディネーターとして市内の高等学校を連携して活動することも視野に入れたい。

地域の教育力や自治力向上し持続可能な人づくりの循環



高校と地域をつなぐコーディネート機能

(2) 事業結果説明書

〔事業の実績〕

○ 事業の実施日程

事業項目	実施日程（令和6年4月1日～令和7年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
コーディネーター配置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
運営指導委員会指導・助言					○					○		
学校設定科目の研究開発	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
地域課題に関する課題研究	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
課題研究発表会						中間発表			○	○	○	○
広報及び情報発信			○		○		○	○				
教育課程・研究推進新学科設置検討・開発・実施	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

○ 事業の実績の説明

① カリキュラムの研究・開発について

本校は特色ある学びの実現に向けた文部科学省の「新時代に対応した高等学校改革推進事業（普通科改革支援事業）」の指定を受け、現行の「知の探究コース」の改編を進めてきた。そして、令和6年度から新たに設置した「地域科学探究科」の2学年以降のカリキュラム内容について検討した。本校や地域の実態を踏まえ、高校生の多様な能力や適性、興味や関心に応じた学びを実現することが求められ、生徒が多様な学びに接することができるよう、学校設定科目としての教科横断型探究の内容を慎重に検討した。本校では、従来のコースでの取り組みを基盤にしつつ、「地域科学探究科」の主体的な学びの教育目標に準じた学習内容を策定した。

生徒がこれまでのコースで培ってきた学びを深化させる形として、新学科において協働と個人の行動を重視した「多様な価値観を共有する人材育成」を目標に掲げ、地元の丹波地域をフィールドとしながら、地球規模で活躍する人材を育成する学びを開発してきた。この中で、本校の特色ある取り組みの一つとして「教科横断型探究」を位置づけている。2年次から開始されるこの学校設定科目の学習内容については、プロジェクト会議を設置し、毎月計画的に議論を重ねてきた。その結果、「愛を探そう！」という抽象的なテーマを掲げ、全教科が関与する年間計画を構築した。この学びを通じて、従来の学習では得られなかった「学びの喜び」を生徒が知ることで、主体的な学習への取り組みを促進し、興味や関心に基づいた学びができる人材を育成していく。また、この取り組みを通じて、総合的な探究の時間を

7単位としたことのメリットを活かした教育活動を展開する。

さらに、スクール・ミッションおよびスクール・ポリシーに基づき、生徒に身につけさせるべき資質・能力を明確化するとともに、それを育成するために必要な教育課程に関する方針も策定した。また、入学時に期待される生徒像を共有し、スクール・ポリシーを設定した。さらに、育成すべき資質・能力に関する評価についても、従来のコースでの取り組みを新学科に引き継ぐ形で内容を精査し、引き続き検討を進めた。このようにして、3年間を通じた体系的なカリキュラムを構築し、学校設定教科を軸とした「教科横断型探究」に基づく計画的な年間学習計画を策定した。探究活動と教科横断型学習を柱とする新たなカリキュラムが設計されている点が大きな特徴だ。

今後は、普通科改革支援指定事業から外れた状況下でも、探究活動に関する情報やデータを提供するとともに、フィールドワークやインターンシップなど体験的な学びの機会や、ICTを活用した海外との国際交流の機会を生徒に提供していく。また、カリキュラム開発を進めるにあたっては、地域や関係機関からの人的・物的な支援が引き続き必要不可欠である。本校は、地域資源を活用しながらこうした取り組みを通じて生徒の主体的な学びを支え、多様な価値観を共有できる人材を育成していくことを目指したい。

ア スクール・ミッションに基づく地域科学探究科におけるスクール・ポリシーの策定

スクール・ミッション	
校訓「進取創造 質実剛健 敬愛和協」の理念のもと、主体的に物事にチャレンジし、多様な価値観を理解し協働する力を備え、人類や地域社会に貢献する人材を育成する。	
スクール・ポリシー	育成をめざす資質・能力に関する方針（グラデュエーション・ポリシー） ① 探究活動を通して主体的な学びのスキルを培う。 ② 丹波から世界への視点を持ち、探究活動を通して多様な価値観を理解する。 ③ グループ研究を通して協働力を育成し、問題解決能力を培う。 ④ 探究活動の成果報告を通して他の取組も理解し、切磋琢磨する中での成長を促す。 ⑤ フィールドワークを通して実社会の理解を深め、自己探究によって自己理解も深める。
	教育課程の編成及び実施に関する方針（カリキュラム・ポリシー） ① 地域から世界への視点を持つ問題解決能力を育成するため、地域や大学と連携した探究活動を実施する。 ② 社会の仕組みや問題点を的確に捉える力を育成するため、フィールドワークを実施する。 ③ 論理的思考力を培うことで学習に対する意欲を育成するため、教科横断的探究を実施する。 ④ 積極的に表現するスキルを身につけるため、自己探究を通して自己理解を深める。 ⑤ 教科探究を通して、自己の興味関心に基づいた学習を提供する。
	入学者の受入れに関する方針（アドミッション・ポリシー） ① 好奇心を持ち、意欲的に探究活動を行う生徒を募集する ② チームの一員として課題に対し、協力し合う意識を持った生徒を募集する。 ③ 地域社会へ貢献し、持続可能な社会の一員となる生徒を募集する。

イ 外部人材を招聘した講演会や探究活動に関する指導

探究Ⅰ＆丹波BALⅠにおいて、SDGsの13番に注目し、生徒が丹波市の「ゼロカーボンシティ宣言」の内容をより正確に理解し、生徒自身が疑問や課題を持ち、主体的に探究活動に取り組むことを目的に講演をしていただいた。

探究Ⅱにおいて、探究活動の魅力を理解するため、神戸大学農学部のゼミ生や京都大学の院生であり鳥取大学の助教の先生にご指導や講演をしていただいた。

また、「知の探究」発表会において、関西学院大学名誉教授が研究に向かう原動力になっている魅力についての講演をしていただく。

	内容	実施日	講師
1	講演「妄想だって研究だ！」	5月1日	鳥取大学助教 吉野 和泰
2	講演「丹波市ゼロカーボンシティ・アクション」	9月19日	丹波市役所 村上 寛幸
3	講演「持続可能な街の未来をデザインしよう！」	10月3日	鳥取大学助教 吉野 和泰
4	講演「物事が『分かる』とはどうゆうことか」	10月23日	鳥取大学助教 佐野 寛明
5	講演『「学校の生態学」をめざして：学校教育を探究する』	3月6日	東京大学教授 藤江 康彦

ウ 国際交流発表会

日 時 令和7年3月3日

交流国 インドネシア、フィリピン、台湾、ミャンマー、ベトナムの高校生

対 象 第2学年全員

内 容 国際交流をしつつ自国の課題や問題点などを話し合い、探究の成果を発表し合い、意見交換を行った。

エ 令和7年度教育課程表（案）

第1学年

丹BAL I II IIIは総合的な探究の時間

類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	20	21	22	23	25	26	27	28	29	30	31	32
1年	現代の国語		言語文化		歴史総合		数学I			数学A		物理基礎		化学基礎		体育		保健		芸術I		英語コミI		論理・表現I		家庭基礎		情報I		丹BAL I		LHR
	②		②		②		③			②		②		②		⑦～⑧		②		②		③		②		②		②		③～⑦		
	2		2		2		3			2		2		2				1		2		3		2		2		2		1		1

「英語コミ」→「英語コミュニケーション」の略

第2学年

類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32		
文系	論理国語		古典探究		地理総合		公共			数学Ⅱ			数学B		体育		保健			英語コミⅡ		発展国語Ⅰ*		生物基礎	② 2	発展化学*	③ 3	世界史探究 日本史探究		丹BALⅡ		教科横断型探究Ⅰ*	LHR	
理系		④ 2	④ 2		② 2		② 2			④ 4			② 2		⑦～⑧ 2		② 1			④ 4		1		② 2	生物基礎	④ 2	生物物理	④ 2	化学	④ 2	③～⑦ 2		1	1

理系理科は「生物基礎・生物(4単位前後期)」と「生物基礎(2単位)」+「物理(2単位)」の2グループに分かれる。

第3学年

類型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32
文系	論理国語	古典探究	体育	英語コミⅢ						論理・表現Ⅱ			メディア イングリッシュ*	世界史探究 日本史探究			政治・経済			応用理科*	発展国語Ⅱ*		発展数学*					数学C	教科横断型探究Ⅱ*	丹BALⅢ	LHR	
													③																			②
													理系	④	④	⑦～⑧	④	②	③	地理探究	生物理		化学		3 数学Ⅲ		②	③				2
2	2	2	4	2	3	4	4	4	3	2	1	2																				

	実施日	実施内容
第1回	8月26日 ※対面、オンライン同時実施	・新学科設置に向けての現状と課題の共有 ・3年間の探究関係カリキュラムについて ・現在の取組と探究活動について協議
第2回	1月30日 ※対面実施	・今年度の取組状況についての報告 ・今後の取組、推進についての指導・助言

③ コンソーシアムの体制および取組

所属	機関の代表者
丹波市	市長 林 時彦
丹波市教育委員会	教育長 片山 則昭
丹波県民局	局長 糟谷 浩行
丹波市商工会議所	会頭 篠倉 庸良
丹波市観光協会	会長 足立 環
丹波医療センター	院長 大野 伯和
丹波市国際交流協会	会長 十倉 直子
福知山公立大学	准教授 杉岡 秀紀
兵庫県教育委員会	高校教育課長 倉橋 良太

これまでの探究活動からの協力体制を発展させる。新学科では生徒の興味ある課題に対して、持続可能な取組とするためにコンソーシアムやOBのつながりを活かした協働体制の構築を目指し、人材育成のための探究活動に取り組み、学びの質の向上をめざした。特に今年度は、市役所の各課や市内の公共施設に協力いただき、地域課題解決のための学びを支援いただいた。

④ コーディネーターの配置および活動内容

所属	氏名
NPO 法人 imagine 丹波	鴻谷 佳彦
丹波市市民活動支援センター	一宮 祐輔

学校職員やコンソーシアム等の地域関係者との関係づくりを大切に、令和6年度の新学科設置に伴う業務に協力した。生徒の探究活動を進めるにあたって、生徒の振り返りから問題点の抽出や悩みへのアドバイス、地域の状況や課題、情報共有、関係機関との調整、フィールドワークの対応などで協力、支援を行った。

- 1 地域や大学と学校の架け橋
- 2 探究活動をするプログラム構築の協力、支援
- 3 探究活動における生徒の躓きを発見し、的確なタイミングでアドバイスができる環境づくり。

		4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月
鴻谷 佳彦	日数	7	8	7	9	9	8	10	8	8	8
	時間	45	40	33	43	47	40	50	40	44	44
一宮 祐輔	日数	5	4	3	4	3	5	5	2	4	8
	時間	29	28	21	28	20	28	35	14	28	28

⑤ 管理機関における事業全体の成果検証、評価

運営指導委員会での検証として、担当指導主事による継続的な評価及び指導を行った。外部委員等による、客観的な視点からの継続的な評価、大学教授等の有識者による、学術的な視点からの継続的な評価を、次年度以降の事業につなげる。

コンソーシアムでの検証は、担当指導主事による継続的な関与及び助言を行い、コンソーシアム構成員による、多角的な視野からの評価、校内の教職員及び生徒による、計画的な自己評価を基に事業の取り組みへの改善に活かす。

活動日程	活動内容
8月26日	第1回運営指導委員会 ・新学科の現状と課題の共有し、今後の方向性について協議
1月30日	地域課題から世界を考える日 ・生徒の発表会に出席し、探究活動の取組状況を把握するとともに、質疑に参加
	第2回運営指導委員会 ・今年度の取組について、成果・評価・課題を総括・指導助言 ・来年度の取組について、概要を説明し、協力体制について打合せ
3月6日	「知の探究」発表会を主催（丹波の森公苑） ・コースの生徒による探究成果発表の場を提供し、学びの機会を提供 ・県下全校及び全国普通科改革支援事業指定校に案内し、本校の取り組みを公開する

⑥ 管理機関による支援体制（予算・人員配置等）

県立柏原高等学校には、令和6年度の新学科設置に向けた支援として、探究活動を効果的に取り組むことを目的とした「探究ルーム」の整備に 400 万円の支援を行った。整備された「探究ルーム」では授業、探究活動などで生徒の学びの深化につながり、より充実した取組となるよう支援した。

⑦ 新学科の設置に伴う関係者（生徒、保護者、地域等）への説明の実施

学校の教育活動をあらゆる機会に発信して広報活動に尽力するとともに、オープン・ハイスクール等では中学生やその保護者、地域への説明を行う。オープン・ハイスクールは年間4回実施した。

第1回 6月 中学校訪問 生徒が出身中学校へ出向き、地域科学探究科についての時代背景から特色の説明と、学校紹介を行う。

第2回 8月 オープン・ハイスクール・地域科学探究科説明会

生徒が主体となって進行する。学校紹介、探究活動等、高校の学びについてパネルディスカッション、国際交流について、先輩と語るなどを企画し、学校を紹介する。生徒が説明する。

第3回 10月 教諭による中学校訪問

本校教諭による市内中学校訪問を実施し、各中学校の3学年担当者や進路指導担当者に直接説明する機会を設け、中学生を直接指導される先生方に新学科の教育内容の理解を求め説明する。

第4回 11月 秋のオープン・ハイスクール、進学相談会

生徒が主体となって進行する。学校紹介、探究活動の紹介、高校生と語ろう(進学相談)を行う。

今後、地域科学探究科の教育内容をまとめた広報用資料等を活用し、新学科の特色とその時代背景などを説明する。学校関係者や発表会での説明を通じて地域科学探究科への理解を促す。

⑧ 成果の普及のための仕組み

新聞等への取材依頼、ホームページへの掲載、オンラインの活用等を通じて、生徒の学びの質が高まるような工夫や取組を行った。

主な発表実績は以下の通りである。

9月中旬 本校探究中間発表

9月26日 普通科改革事業指定校発表会への出席

11月13日 指定校視察(広島市立美鈴が丘高等学校)

12月22日 「総合的な探究の時間」共創イベントにおける実践発表会(東京学芸大学)

1月30日 「地域課題から世界を考える日」(本校)

2月8日 兵庫県高等学校探究活動研究会(神戸市立御影公会堂)

3月6日 「知の探究」発表会(丹波の森公苑)

今後、大学等が実施する発表会、研究会への参加を継続すると共に、全国、世界で活躍する卒業生を巻き込み、事業への理解と協力体制を構築していく。成果の普及のためにオープン・ハイスクール、出身中学校でのプレゼンテーションに取り組めるよう関係者への理解と協力を促進する。

⑨ 国の指定終了後の取組継続のための仕組みづくりに関する取組

学校とコンソーシアムの継続的な連携が続く仕組みづくりに取り組む。新学科の特色ある学びを支えるため、コンソーシアムを構築する機関等との継続的に連携が続く仕組みづくりが求められる。国の指定期間内で、それぞれの機関と更なる連携・協働を行い、学校内の学びから学校外での学びへと発展できる「地域全体の学び」となるよう新たな仕組みを構築する。

同時に、国の指定期間後もコーディネーター機能が維持できるよう、コーディネーター加配に関する予算の確保、教職員のコーディネーター機能の移行、企業協力による人員配置等の方策を含めて、コーディネーターの望ましいあり方について指定期間中に検討し、方向性を決定する。コーディネーターの配置では予算面での支援が必要である、連携先はあるが、講義等で協力いただく際の予算や資金面でのバックアップも必要である。調整に多大な労力を要することがあり、コーディネーターが入っても教員への負担が大きく、業務改善にも取り組んでいくことが必要である。

(3) 研究推進部活動内容

昨年度から研究推進部という部署を中心に、新学科の3年間の探究プログラムの構築を積み上げてきた。それをブラッシュアップしつつ、本校の特色ある取り組みの一つである教科横断型探究の年間プログラムの構築を目指した。

また、コーディネーターの活用についてもより持続可能な形態を検討しつつ、安定した3年間の探究的学びのプログラムを構築する運用をしつつ検討を繰り返した。

月	事業の内容	
	カリキュラムや教育方法等の開発	関係機関等との連携・協力体制の構築
4月	探究学習ガイダンス(全学年) 地元課題のワークショップ 教科横断プロジェクト会議	地元でご活躍されている方々(12名)
5月	教科横断プロジェクト会議 探究講演会	鳥取大学・学習関係企業 鳥取大学
6月	フィールドワーク 教科横断プロジェクト会議	地元企業
7月		
8月	第1回運営指導委員会 東京大学訪問(1年地探) 夏のオープンハイスクール、新学科説明会 フィールドワーク 教科横断プロジェクト会議	関西学院大学、東京大学、福知山公立大学、地元教育機関関係、観光協会、商工会議所等
9月	丹波市出前講座(ゼロカーボンシティ宣言) 教科横断プロジェクト会議 普通科改革推進事業発表会	丹波市役所、地元企業 文部科学省
10月	秋のオープンハイスクール 探究講演会 京都大学出前講座 中学校訪問(新学科説明) 全国コーディネーター研修	丹波市・丹波篠山市教育委員会、小学校、中学校 鳥取大学 丹波市内6校・丹波篠山市内5校 三菱UFJリサーチ&コンサルティング東京本社
11月	視察 教科横断プロジェクト会議	広島市立美鈴が丘高等学校
12月	東京学芸大学「探究の共創」	東京学芸大学
1月	地域課題から世界を考える日 フィールドワーク引率 第2回運営指導委員会 新学科プロジェクト会議	関西学院大学、東京大学、福知山公立大学、地元教育機関関係、観光協会、商工会議所等
2月	全国コーディネーター研修 全国コーディネーターフォーラム 令和6年度兵庫県探究研究会	文部科学省 文部科学省 兵庫県教育委員会
3月	「知の探究」発表会(6日実施予定) 大阪大学訪問 職員研修会	兵庫教育大学

1 通年

- 1) 教科横断型探究年間プログラム構築・探究指導体制の確立
3年間を見通した探究学習計画のシステム・体制づくり
現行のプログラムをブラッシュアップ
令和7年度から始まる教科横断型探究年間プログラムの構築
- 2) 新学科生徒募集
新学科の内容 PR
2度のオープンハイスクール(夏・秋)、各中学校への広報活動

2 時期別

- 1) 全国コーディネーター研修(8、10、2月)
全国の同事業を推進する学校・自治体・管理機関と意見交換
実施にあたっての指導を受ける
- 2) 発表会の企画・運営・引率
中間発表、地域課題から世界を考える日、「知の探究」発表会の企画・運営
関係機関、同事業推進校の招待、配信
外部へは、本年度は3回エントリー(甲南大、東京学芸、兵庫県)
- 3) 運営指導委員会
年間2回実施し、指導委員の方から意見をいただき、ブラッシュアップする。

3 課題

- 1) 探究活動の発表体制の構築
探究活動を実施される学校が増えたことにより、各発表会へのエントリー数が制限された上、そのエントリー数については、1~2ヶ月前に連絡が来る状況で、生徒たちへの発表の機会を提供することが不十分になってしまった。今後、発表の在り方を検討する必要がある。
- 2) コーディネーターの維持
本年度はコーディネーター2名の体制で行ってきたが、この体制を維持するため丹波市に支援を求めている。令和7年度については、不確定ながら何とか目途が付いているが、不確定要素が多く安定した体制を構築していく必要がある。
- 3) 探究活動の浸透
授業の実施を通して、より学校全体で指導できるような形態を少しずつ作りたい。

(4) 地域科学探究科（新学科）の3年間の探究プログラム

【教育目標】

地球規模の視点に立ち、地域との協働による探究活動を通して、社会の持続的な発展や価値の創出に貢献し、自分の将来にも結び付けていく論理的思考力や多角的な問題解決能力を育成する

単位数	1年			2年	3年	
	1学期	2学期	3学期	1～3学期	1学期	2学期 3学期
1	丹BALⅠ 探究基礎講座	丹BALⅠ 探究基礎実践	丹BALⅠ まとめ発表	丹BALⅡ 探究応用実践	丹BALⅢ 探究発表	丹BALⅢ 教科探究
1					丹BALⅢ 自己探究	
1					知の探究Ⅱ 教科横断型探究Ⅱ	

進路実現のための4つの充実した探究的な学習活動

①自身のスキルを磨く 充実した探究活動 丹BAL I 丹BAL II 丹BAL III (探究発表)	②思考力を磨く 教科横断型探究 知の探究 I・II (教科横断型探究 I・II)
テキストを利用しミニ探究 ⇒ グループで探究基礎実践 ⇒ 個人で自由な探究応用実践 ⇒ 校外で探究発表会	様々な進路に対応した思考力を磨く 教科を超えた知識の組み合わせ 解を創造する思考力 身につけた力を社会で生かす
③自分の魅力を発見し 表現スキルを磨く自己探究 丹BAL III (自己探究)	④教科の魅力を探究する 教科探究 丹BAL III (教科探究)
自己理解の深化と創造性を開花 自己の成長と自己肯定感の向上 自己の魅力を言語化するスキル	学びたい教科の学びを深める 進路実現のための教科の探究 自己啓発やスキルの向上 成果や達成感の実感

テーマ： 愛を探そう

コマ数	背景時代	項目	テーマ	内容	コラボ教科	
1		オリエンテーション	愛について①		研究推進部	
2			愛について②		研究推進部	
3	古代史	家族愛	貴族の暮らし	貴族の住まい「寝殿造」 NHKの映像を用いて、貴族の住まいを知る	地公	家庭
4			庶民の暮らし	食について、素材そのものの味を活かした料理であり、和食の原型となっていた時代	地公	家庭
5		自然愛	万葉集の抜粋①	例：春過ぎて 夏来るらし 白たへの 衣干したり 天の香具山	国語	英語
6			万葉集の抜粋②	1) 国語での意味を理解してから、英訳を考える 2) 香具山について学習	地公	理科
7		友情	庶民の遊び 紙鳶①	絵を用いて、当時の遊び方を説明する。実際に身近なものを利用し作ってみて、グラウンドで飛べるかどうかを試す	数学	理科 美術
8			庶民の遊び 紙鳶②		数学	保体
9		恋愛	古今和歌集の抜粋①	例：伊勢の海の磯もとどろに寄する浪 恐(かしこ)き人に恋ひ渡るかも	国語	地公
10			古今和歌集の抜粋②	和歌の意味を理解したうえで英訳してみる	国語	英語
11	近世史	家族愛	色	江戸の文化から色について学ぶ	情報	家庭
12			江戸時代の子育て	日本その日その日の抜粋を読んで、当時の子育ては今とどう違うのかを話し合う Japan Day by Day	英語	保体
13		自然愛	お城の発展①	城の構造、位置 「姫路城」	地公	理科
14			お城の発展②	石垣の積み方（勾配と反り）	理科	数学
15		友情	和算①	和算誕生の経緯、和算とは	数学	国語
16			和算②	国語で問題の理解をしてから、和算で解いてみる	数学	国語
17		恋愛	日本の歌舞伎	歌舞の名作を取り上げる 「修禪寺物語」と頼家の仮面について	地公	音楽
18			海外の戯作	音楽鑑賞し、有名シーンの解説する ロミオとジュリエット	英語	音楽
19	近現代史	家族愛	洋食	食文化の洋風化について調べ、プロセスを表す図解表現を用いて洋食の調理手順を表し、思考を可視化する	家庭	情報
20			産業革命、蒸気機関	産業革命の始まりについて急激な工業化による歴史的な影響（子供や女性の労働など）を考察する	保体	情報
21		自然愛	水の東西	東洋と西洋で水に対する考え方の違い	国語	情報
22			富岡製糸場	明治時代に西洋技術を導入した日本初の器械製糸工場	理科	地公
23		友情	明治時代の学校で習う歌	日本と海外の童謡を視聴を、比較する	英語	音楽
24			ビー玉遊び	明治中期から流行していた	保体	地公
25		恋愛	海外：ロマン主義→ロマン派音楽	「自由」や「個性」、「想像力」を全面に押し出したのがロマン派音楽	音楽	英語
26			国内：恋愛という言葉	恋愛という言葉は明治からといわれている 明治までにI love you を「月が綺麗ですね」と訳す	英語	地公
27	現代史	家族愛	ライフプラン 「投資について」	ライフプランのシミュレーション、 複利の計算	数学	地公
28			食文化	カレーについて	理科	家庭
29	現代史	自然愛	汚染と健康	水俣病などの公害、「有機水銀」等	保体	理科
30			自然界の黄金比と白銀比	植物・動物中の黄金比 ひまわり、蜂の巣 「遮光器土偶」「バルテノン神殿」「ピラミッド」から考える	数学	理科
31		友情	友達って？仲間って？一緒に絵本を作ろう①	友情について改めて考える グループ分けて、チームで友情に関する絵本を作成する	国語	情報
32			友達って？仲間って？一緒に絵本を作ろう②		国語	情報
33		恋愛	博士の愛した数式	友愛数	数学	国語
34			少子化問題、結婚について	出生率等のデータ分析	保体	数学
35		総振り返り			研究推進部	

(5)運営指導委員会

〔第1回運営指導委員会〕

○ 次第

○日 時：令和6年8月26日（月） 13：30～15：00

○場 所：柏原高校 柏陵会館1階研修室

1 開 会（15分）

■挨拶：校長 稲次 一彦

兵庫県教育委員会 高校教育課 指導主事 永野 祐一郎

■出席者紹介

■運営指導委員長の選出・挨拶

2 報告事項

■令和5年度の成果および「地域科学探究科」設置への取組（稲次校長）（10分）

- ・本校（普通科・新学科）のスクール・ミッション、スクールポリシー
- ・総合的な探究の時間（「丹 BAL」）・学校設定教科・科目の開発…教育課程等の検討
- ・成果普及・情報発信

中学校説明会（6月）、オープンハイスクール（8月・10月）

市内中学校訪問（10～11月）で職員への説明、中高連携の強化

さまざまな発表会への参加・交流、学校訪問の積極的な受入れ、ホームページ等

- ・教員の意識・資質の向上…研究推進部を中心に各部署と連携
- ・コーディネーターの取組、関係機関等との連携・協力体制

〈質疑応答〉

■「地域科学探究科」の教育内容および各学年の探究授業・取組（研究推進部）（15分）

- ・1学年
- ・2学年
- ・3学年

〈質疑応答〉

3 意見交換（40分）

■「地域科学探究科」を含めた本校の生徒募集について

■教科横断的な学びについて

■コンソーシアムの連携が続く仕組み作り、コーディネーター機能の維持

■本校教員の探究指導力向上に向けての研修等の充実

4 今後の予定、その他（研究推進部）（5分）

- ・令和7年1月30日（木）「地域課題から世界を考える日」→午後：第2回運営指導委員会
- ・令和7年3月 7日（金）「知の探究」発表会（丹波の森公苑）

5 閉 会…稲次校長

○ 第1回運営指導委員会 議事録

出席者（敬称略）

高畑由紀夫（関西学院大学 名誉教授）
杉岡 秀紀（福知山公立大学地域経営学部 准教授）
藤江 康彦（東京大学大学院教育学研究科 教授）
足立 環（丹波市観光協会 会長）
尾松 正章（丹波市教育委員会学校教育課 副課長兼指導係長）
永野 祐一郎（兵庫県教育委員会事務局高校教育課 指導主事）
稲次 一彦（兵庫県立柏原高等学校 校長）
高橋 義尚（兵庫県立柏原高等学校 教頭）
尾花 尚史（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部長）
谷本 育哉（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部 教諭）
王 雅林（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部 臨時講師）
鴻谷 佳彦（コーディネーター）

欠席者

中瀬 勲（兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長）
原 孝拓（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部副部長）
一宮 祐輔（コーディネーター）

1. 開会

- ・挨拶：稲次校長、永野 祐一郎指導主事
- ・運営指導委員長の選出：高畑 由紀夫（関西学院大学 名誉教授）
副委員長の選出：杉岡 秀紀（福知山公立大学地域経営学部 准教授）

2. 報告事項

- ・「地域科学探究科」に向けた取組の説明（稲次校長）
 - ・ p 3 を元にスクールミッション、スクールポリシーの説明
スクールミッション：校訓に準拠
スクールポリシー：「地域科学探究科」は探究と体験を重視
カリキュラムポリシー：フィールドワークなどを通じて地域から世界への視点
教科横断型探究を進めていく
- ・ R 5 の成果（稲次校長）
 - ①丹 BAL I、II の導入
 - ②学校設定科目による、教科横断型探究について
 - ③成果普及、情報発信について
課題：「地域」「探究」という新学科へのイメージ、中学校訪問による新学科の説明
 - ④オープンハイスクールのアンケートについて
中学生と保護者からの意見
 - ⑤教員の意識・資質向上
探究活動に対する共通理解と指導力の向上

⑥コーディネーターの取り組み

課題：本事業終了後のコーディネーターの確保

⑦関係機関等との連携・協力体制

- ・研究推進部の活動内容について（尾花）
- ・昨年度に研究推進部を発足、「地域科学探究科」の7単位の中身について
- ・八幡高校（福岡県）の教科横断型探究の視察
- ・新学科プロジェクト会議
- ・京都大学出前講座を本年度も実施
- ・甲南大学リサーチフェスタへの参加
- ・教科横断型探究による魅力化 テーマ「愛を探そう」
- ・実施計画 p 11～
- ①教科横断型探究の中身について
- ②持続可能な柏原高校の探究に向けて

3. 質疑応答（敬称略）

高畑 Q. オープンハイスクールのアンケートの解答者のうち、入学者は何名くらい？

「大変よかった」と解答している生徒は入学しているのか？というようなクロス集計はしているのか？

A. クロス集計は実施できていない

Q. 「愛を探そう」というテーマは来年度だけのテーマなのか？

このテーマは学年ごとに変えるのか？

A. テーマは数年は継続予定

提案. 日本語の“愛”には様々な意味があることを前提に注意して取り組むと良い

“愛”には様々な世界があることを生徒に伝えることが重要

杉岡 Q. 1年生の地域科学探究科への満足度などのアンケートはあるのか？

A. 生徒へのアンケートは現在実施していない。年度末に実施予定。

1年生の期間は普通科と大差がないので、新学科の良さを感じるのは来年度からでは？

Q. 進路実現に向けた、探究担当者と進路指導部の連携について。

A. 連携できている。総合型選抜による入試に向けて。

進路指導部主導による東京大学実習体験（8月）や進路探究WEEKを実施している。

Q. 丹波市内の3つの高校での共同（未来プロジェクト以外）はあるのか？

A. 3校での連携は不十分。丹波市や県の支援による、学校ごとの魅力化も目指したい。

藤江 Q. 地域科学探究科の1年生の授業の姿は、普通科の生徒と違いはあるのか？

授業のスタイルにも普通科との違いはあるのか？

A. 探究の授業における、スピードや発想力はぜんぜん違う。

普通教科は、教科によって試験内容が違う場合もある。

地域科学探究科は個性的な生徒が多い。クラス内で個性を尊重できている。

Q. 教科横断型探究の中身の選定は学ぶ時期も重要。35時間の授業がうまくいくような仕掛けを計画しているのか？

A. 抽象的なテーマにしたことで、学ぶタイミングの問題は回避できる。

足立 意見：「愛を探そう」は壮大なテーマ。“愛”には失恋などネガティブな面もある。
教師のよる心のケアも大事。

尾松 Q. R6年度入学の1期生の学びのプロセスを、次年度以降も引き継いでいくのか？
学年ごとに違うアプローチをしていくのか？

A. 昨年度から学年ごとに探究の発表内容を冊子にして、各教室に設置している。
3月の発表には1年生も参加するので、先輩の発表を見聞きして興味を持てば同じテーマで探究をしてもよい。

鴻谷 報告：丹波市の支援により黎明館に自習室を設置

杉岡 意見：授業以外で自発的に探究に取り組みたい生徒の活動の場の用意も必要になってくる。
学校のカリキュラム以外の生徒の探究を応援する仕組み（行政による）が重要

高畑 意見：地方行政における高校（学校）の役割は重要

藤江 意見：先輩の探究の発表が冊子にまとめられ、後輩のテキストになっているのが良い。
地域科学探究科の生徒だけでなく、普通科の生徒も探究を通して普通科目の授業への取り組みが変わったり、大学入試への姿勢が変わることが理想的。

4. 今後の予定（尾花）

- ・ R7 1月30日（木）午前：「地域課題から世界を考える日」
午後：第2回運営指導委員会
- ・ R7 3月 6日（木）「知の探究」発表会

5. 閉会

- ・ 学校長挨拶

〔第2回運営指導委員会〕

○ 次第

○日 時：令和7年1月30日（木） 14：00～15：30

○場 所：柏原高校 柏陵会館1階研修室

1 開 会（10分）

■挨拶：校長 稲次 一彦

■出席者紹介

2 報告事項（進行：高畑委員長）

■令和6年度の探究活動および新学科「地域科学探究科」の取組（研究推進部）（25分）

・「地域科学探究科」の教育課程及び教科横断型探究の年間スケジュール

・視察訪問（広島市立美鈴が丘高等学校）

・研修（カシオ計算機㈱・文部科学省・三菱UFJリサーチ&コンサルティング東京本社）
普通科改革支援事業指定校発表会（文部科学省）

・他府県からの学校訪問受け入れ…大阪府立狭山高等学校、大阪府立東百舌鳥高等学校
福岡県教育委員会、福岡県立田川高等学校
京都府立山城高等学校

・本校生徒の3年間の実態調査と全国平均（東京学芸大学）

・本校職員の3年間の意識調査結果

・各学年の探究学習年間計画

第1学年（丹 BAL I & 総合的な探究の時間 I）

第2学年（探究Ⅱ・丹 BALⅡ）

第3学年（総合的な探究の時間Ⅲ・グローバル）

〈質疑応答〉

3 意見交換（40分）

■本校の地域科学探究科の魅力発信について

・成果の普及のための仕組み…オープンハイスクール（8月・10月）

中学校訪問と職員への説明（10月）、情報発信

■各探究授業の発展、教科横断的な学びについて

■コーディネーターの活用

■本校教員の探究指導力向上を支援する研修等の充実

4 今後の予定、その他の連絡（10分）（研究推進部）

・令和7年2月8日（土）「兵庫県高等学校探究活動研究会」（神戸市立御影公会堂）

・令和7年3月6日（木）「知の探究」発表会（丹波の森公苑）…午前

5 閉 会

■挨拶：兵庫県教育委員会 高校教育課 主任指導主事 浅川 規幸

○ 第2回運営指導委員会 議事録

出席者（敬称略）

高畑由紀夫（関西学院大学 名誉教授）
藤江 康彦（東京大学大学院教育学研究科 教授）
中瀬 勲（兵庫県立人と自然の博物館 名誉館長）
足立 環（丹波市観光協会 会長）
尾松 正章（丹波市教育委員会学校教育課 副課長兼指導係長）
浅川 規幸（兵庫県教育委員会事務局高校教育課 主任指導主事）
稲次 一彦（兵庫県立柏原高等学校 校長）
高橋 義尚（兵庫県立柏原高等学校 教頭）
尾花 尚史（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部長）
原 孝拓（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部副部長）
谷本 育哉（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部 教諭）…記録
王 雅林（兵庫県立柏原高等学校 研究推進部 臨時講師）
鴻谷 佳彦（コーディネーター）
一宮 祐輔（コーディネーター）

欠席者（敬称略）

杉岡 秀紀（福知山公立大学地域経営学部 准教授）

1. 開 会

- 挨拶：校長 稲次 一彦
- 出席者紹介

2. 報告事項（進行：高畑委員長）

- 令和6年度の取組（尾花）
 - ・「地域科学探究科」の教育課程及び教科横断型探究の取組について
 - ・研修（カシオ計算機（株）、文部科学省）
 - ・コーディネーター研修（三菱UFJリサーチ&コンサルティング東京本社）
 - ・視察訪問（広島県立美鈴が丘高等学校）（原）
 - ・中学校訪問について…丹波市、丹波篠山市
 - ・他府県からの学校訪問受け入れ…大阪府立狭山高等学校、大阪府立東百舌鳥高等学校（10/23）
福岡県教育委員会、福岡県立田川高等学校（11/21）
京都府立山城高等学校（R7/1/29）
 - ・本校生徒の3年間の実態調査と全国平均（東京学芸大学）
 - ・本校職員の3年間の意識実態調査結果
 - ・各学年の探究学習年間計画
 - ・第1学年（丹BALⅠ&総合的な探究の時間Ⅰ）
 - ・第2学年（探究Ⅱ&丹BALⅡ）
 - ・第3学年（総合的な探究の時間Ⅲ&グローバル）

3. 意見交換（敬称略）

- 本校の地域科学探究科の魅力発信について

藤江 Q. 探究学習の記録冊子は、柏原高校の魅力発信に何か活用する予定なのか。
A. 記録冊子は魅力発信というより、探究の継承を主な活用目的としている。
視察に来られた高校には配布しているが、中学校訪問では配布等はしていない。

高畑 Q. 10月の新学科説明会で話した新学科の魅力は？
A. 探究の単位数の増加。探究に重きをおいて進学実績につなげていく思いを伝えた。
世間全体の変化、大学入試の変化など。

足立 Q. 探究の魅力を発信するターゲットは？
A. ターゲットは中学生、中学生の保護者。
Q. 地域への発信も重要では？
A. 来年度から丹波市から予算をいただき、SNSの活用などを計画している。

中瀬 柏原高校で学んでいる在校生が、中学校へ出向き話をするのが重要である。

尾松 高校の中での変化は、中学校の教員には見えにくい。伝わる情報はごく一部。
高校の教員が中学校訪問で説明したり、高校の発表会に参加していただくような機会が
少ないと伝わりづらい。できるだけ交流をもつことが重要。

藤江 どのように発信すれば中学生に伝わりやすいのか、高校生の意見を参考にしているか。

■各探究授業の発展、教科横断的な学びについて

高畑 Q. 「愛を探そう」における細かなテーマは教員の専門性にあわせて設定したのか？
A. それぞれの時代の様々な「愛」を書物や出来事から見出していく学びが目標。
教員の専門性より、テーマを先に設定した。数年はこのテーマを継続していく予定。

中瀬 Q. 「愛を探そう」のテーマで教科横断型探究をすることは教員の負担では？
A. このテーマは、様々な教科の教員からの提案のなかから完成したもの。

■コーディネーターの活用

校長 文科省の予算は今年度で切れてしまうが、丹波市の協力でコーディネーター1人の予算
を用意できる予定。DXハイスクールの認定を受けることができれば、追加で人件費を
用意できる見込み。

中瀬 国立公園のアクティブ・レンジャー制度が良い参考になるかもしれない。

■本校教員の探究指導力向上を支援する研修等の充実

中瀬 県立人と自然の博物館での教員研修を活用してみてもは。

高畑 兵庫教育大学との連携はどうか。

4. 今後の予定、その他の連絡（研究推進部）

- ・令和7年2月8日（土）「兵庫県高等学校探究活動研究会」（神戸市立御影公会堂）
- ・令和7年3月6日（木）「知の探究」発表会（丹波の森公苑）…午前

5. 閉 会

■挨拶：兵庫県教育委員会 事務局高校教育課 主任指導主事 浅川 規幸

(6) 視察訪問

○受け入れ

日 程	訪 問 団 体
10月23日(水)	大阪府立狭山高等学校 大阪府立東百舌鳥高等学校
11月21日(水)	福岡県教育庁教育振興部高校教育課 福岡県立田川高等学校
1月29日(水)	京都府立山城高等学校

○視察

広島市立美鈴が丘高等学校視察報告

学校改革の方法・現状に向けて先進的な取り組みを行っている広島市立美鈴が丘高校を視察した。美鈴が丘高校は広島市の西の住宅地の一端にあり、周辺から多く生徒を集めていたが、同地域の高齢化が進み生徒募集が難しくなったことや数年前に私立に多くの生徒が流れてしまったことがきっかけで、教員間に危機感が生まれ、改革の機運が高まった。本校は今年の生徒募集で大きく定員を割り込んでしまった。中学校訪問を前年度と比べ早い段階で行うなど打てる手段を打ったが抜本的な解決策であるとは言い難い。そこで学校改革を大々的に打ち出している美鈴が丘高校への視察を決めた。

教員文化の違いに驚いたことが1番大きかったが、「改革すること」に関しては生徒の意見を受け入れることを重要視していることが伝わってきた。生徒自身に学校全体に向けた発言権があり、やりたいこと・変えたいことを教員に向けてプレゼンするなど意欲的であった。また、その内容もわがままなものではなく、生徒たちの意見をまとめ合理的に考えられたものであった。このような風土ができたのは、生徒の発言を受け入れてきたからだとする。オープンハイや中学校訪問などの広報では、多くの部分で生徒が活躍する。学校説明に関してもほとんどを生徒が語るなど教員の出番はほとんどないとのこと。中学校訪問でも教員だけでなく、生徒も広報部として連れていき模擬授業や学校説明で活躍するなど生徒が自分の言葉で説明する機会を多く設けているようである。ここでの活動を通して自分に自信が持てたこと、人前で発言できるようになったことも大きな成長だが、それだけではなく、これを成し遂げるために多くの数練習し、教員とコミュニケーションをとり続けたことが風土の根底にあるのではないかと考えた。実際に広報に関しては中学生からの評判がとても高く、これまでなかったような高評価を受けるようになったとか。合田校長先生も生徒の話を聞くこと、そしてそれに対して最初から反対意見を持たないようにすることが大切であると説く。聞いてから No を言うことと聞く前から No を言う(もしくはその姿勢をとる)ことは意味が大きく異なる。まずは生徒の話を聞くこと、そして否定しないことが大切だということを再確認することができた。一教員としてはこのことに関してできている人が多く感じる。それは生徒が1対1の場で本音を漏らすことが多いからである。教員との信頼関係ができている証拠である。しかし、学校全体となった時、その体制がとれているとは思えない。学校の体制に不満があり、口にはすれど行動に移そうとする生徒がいないからだ。体制側としては当然大人の事情で突き返さなければならないこともあるが、生徒側の意見を体制側として受け入れる機会が乏しいことが柏原高校の大きな課題となっていないのではないかと。生徒側は自分の意見が通り改革が実現すること、もしくは改革に向けて話し合いを繰り返し、結果 No を突き付けられても話し合いのもと双方の意見を理解するから納得することができる。本校の現状では「意見を言っても仕方ない。」という空気感になってしまっている。それを打破するためにも、まずは生徒の思いに耳を傾け、変化を起こすか、徹底的な話の場を設けることが、主体的な生徒を育てる大きなきっかけとなるのではないだろうか。(もちろん担当教員の負担大、生徒会との仕事のすみわけ等ほかの課題も山積みであるが…)

体制や条件が違うため取り入れて実施できることは多くない。しかし、校長先生は終始「生徒の主体性を…」、「意見をぶつけ合う機会を…」とおっしゃっていて、それだけ生徒のその部分を育てたいという思いが伝わってきた。本校も探究活動の体制が少しずつ固まりはじめ、生徒自身が自己の内面と対話する機会が増えている。あとは教員がその生徒の思いをどう受け止めるのかにかかっていると強く感じた。